

「私のルーツ」

佐賀県 唐津市立浜玉中学校 3年

吉原 直 (よしはら なお)

私のルーツは満州にある。

私の祖父の名前は「満」という。昭和十一年に旧満州の奉天で生まれたのがその由来だそうだ。三年前に七十七歳で他界し、直接本人に戦争体験について聞いたことはないが、お祝い事があると自ら台所に立ち、水餃子を振る舞ってくれたことはよく覚えている。

私が、祖父とその家族が体験したことについて知りたいと思うようになったのは、祖父の弟が最近新聞やテレビの取材に応え、その当時の体験を耳にするようになったことがきっかけだ。戦後、旧満州や朝鮮半島などから引き揚げてきた人たち三千三百人余りの膨大な資料が、祖父と弟が働いていた商店の二階にあった佐賀県厚生会伊万里分会の事務所跡で確認されたのだ。海外での生活の実態や引き揚げてきた時の状況、その後の日本での生活ぶりなどを記した貴重な資料として研究が進められていることが紹介された。取材で祖父の弟は「書類の存在を知っているのは、自分だけになってしまった。この、引き揚げ者一人一人の物語が社会的に忘れ去られることなく、研究という形で光が当たることは嬉しい。先人たちの思いを後世に語り継いでほしい。」と語っていた。

番組を見終わった私に、父は一冊の本を手渡した。百ページほどの薄い本の表紙には、「海草の旗ーわたしの引揚げ記録ー」とあり、著者が祖父の姉であることを知った。

この本によると、祖父の家族は昭和八年に旧満州に渡ったそうだ。曾祖父は満州鉄道勤務で、お手伝いが九人もいる邸宅で裕福な暮らしをしていて、水餃子の作り方は、お手伝いの中国人から教えてもらったようだ。

しかし、敗戦をきっかけにソ連軍が進駐し、戦時中に曾祖父が親しくしていた中国人から「ここには娘さんたちがソ連軍に連れ去られてしまう。」という情報を聞き、祖父の姉二人は、当時十三歳と十歳という若さにもかかわらず、親元から離され、二人だけで日本を目指すことになったそうだ。その途中、敗戦国の日本人の命が無造作に扱われる中で、住み込みのお手伝いとして半年間面倒を見てくれた北朝鮮の家族がいたおかげで、帰国が果たせたと書いてあった。国同士が争っていても、そこに住む人々のことを偏見や差別の目で見えてはいけないという教訓ではないか。二人は朝鮮半島の半分を、空腹に耐えながら徒歩でソウルまで五十日以上歩き、奉天脱出から一年二ヶ月後に故郷伊万里に戻った。別ルート

で先に帰国した両親に再会した時に、仏壇に二人の位牌が飾ってあったことから、当時少女二人で帰国することがいかに過酷だったかが想像できる。

命からがら引き揚げてきて、家族と再会したのもつかの間、今度は貧困と偏見が待っていた。曾祖父は、平戸で仕入れたいりこやかまぼこを闇市で売り、一家の命をつないだ。国が用意した引き揚げ者専用の八畳一間の木造アパートに、運良く家族八人で住めたそうだが、入居できたのは希望者のわずか二%だけだった。そして、引き揚げ者に対する偏見は、祖父の弟も苦しめた。小学校で地区長になった時、大人から「また引き揚げ者が代表になった。」と言われ、悔しい思いをしたのだ。

祖父の姉は本のあとがきの中で「戦争は絶対に反対。二度と自分と同じ道を子どもたちに歩ませてはならない。」と記している。日本人として記録に残しておきたいという強い願いに違いない。また、祖父の弟の「引き揚げ者の歴史を後世に伝えたい」という思いも、何よりも切実に平和を願う表れではないか。

私はこれまで、長崎で原爆について、ロサンゼルスで日系アメリカ人の歴史について、知覧で特攻隊について現地の資料館で学んできた。戦争について勉強したつもりでいたが、身近な親戚のことを全く知らない自分が恥ずかしくなった。この歴史を語り継ぎ、二度と戦争を繰り返さない。北朝鮮のミサイル問題など、不安や緊張で揺らいでいる世界情勢だからこそ、平和な世界の実現のために、私たちができることをしっかり考えていきたい。

戦後七十年が過ぎ、「引き揚げ」という言葉が死語となろうとしている。この言葉を語り継ぐため、私は近い将来、引き揚げ者百四十万人が上陸した佐世保の浦頭引揚記念館を訪れたい。人々がどんな思いで帰国を果たし、歩んでいったかを知りたい。引き揚げ者を不眠不休で保護した佐世保引揚擁護局は、現在ハウステンボスに生まれ変わり、戦争の遺構はどんどん風化していくからだ。

そして、私が結婚して家族をもったら、祖父がそうしていたように、水餃子を家族に振る舞いたい。「何でうちは焼き餃子じゃなくて水餃子なの？」と子どもに聞かれたら、私のルーツについて話してみようと思う。それが平和のバトンを引き継ぐ私の使命だと思うからだ。